

「将軍ノ代」への始動：
『太平記』 卷十七の構成と展開

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷垣, 伊太雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4629

「將軍ノ代」への始動

―『太平記』卷十七の構成と展開―

谷 垣 伊 太 雄

一

兵庫に下向する途中、桜井の宿で楠正成が正行に語った「正成已ニ討死スト聞ナバ、天下ハ必ズ將軍ノ代ニ成ヌト心得ベシ」(注)〔卷十六〕という、その「將軍ノ代」が、正成兄弟討死後に、どのように実現していくのか、それが語られるのが卷十七である。

まず、目録を掲げる。

- 一、山政事付日吉神託事
- 二、京都兩度軍事
- 三、山門牒送南都事
- 四、隆資卿自八幡被寄事
- 五、義貞軍事付長年討死事
- 六、江州軍事

七、自山門還幸事

八、立儲君被著于義貞事付鬼切被進日吉事

九、義貞北国落事

十、還幸供奉人々被禁殺事

十一、北国下向勢凍死事

十二、瓜生判官心替事付義鑑房蔵義治事

十三、十六騎勢入金崎事

十四、金崎船遊事付白魚入船事

十五、金崎城攻事付野中八郎事

正成が提案したにも拘らず、坊門清忠によって却下された^{後醍醐天皇の山門臨幸}が、結局は実施され、比叡山に拠る官軍と、京都(東寺を拠点とする)の將軍・足利尊氏勢との合戦が、建武三年(一三三六)六月一日から展開していく(第一章)。

ここでは、江田源八泰氏（將軍方）と杉本山神大夫定範（官軍方）との対決や官軍の本間孫四郎・相馬四郎左衛門の強弓ぶりが描かれる一方で、高豊前守（將軍方）に内通した山門の金輪院律師光澄・今木少納言隆賢の最期も詳述される。高豊前守の勢五百余人を秘かに叡山へ道案内した隆賢の場合、「少シモ道ニ迷ベキニテハ無リケルガ、天罰ニテヤ有ケン、俄ニ目クレ心迷テ」山中を彷徨した揚句、結局捕えられて斬首されたことが、「忝モ万乗ノ聖主、医王山王ノ擁護ヲ御憑有テ、臨幸成タル故ニ、三千ノ衆徒悉仏法ト王法ト可ニ相比ニ理ヲ存ジテ、式ナク忠戦を致ス処ニ、金輪院一人山徒ノ身トシテ我山ヲ背キ、武士ノ家ニ非シテ將軍ニ属シ、剩弟子同宿ヲ出シ立テ、山門ヲ亡ント企ケル心ノ程コソ淺猿ケレ」と語られ、光澄についても、「無幾程シテ、最愛ノ子ニ殺サレヌ。其子ハ又一腹一子ノ弟ニ討レテ、世ニ類ナキ不思議ヲ顯ケル神罰ノ程コソ怖シケレ」と記される。

更に「敵引退カバ、立帰^(注2)ヌサキニ攻立テ、山上ニ攻上リ、堂舎・仏閣ニ火ヲ懸テ、一字モ不殘焼^(注2)ヒ、三千ノ衆徒ノ頸ヲ一タニ、大講堂ノ庭ニ斬懸テ、將軍ノ御感ニ預リ給ヘカシ」と命じた事について「惡逆ノ程コソ淺猿ケレ」と記されていた高豊前守は、六月二十日の合戦の中で「太股ヲ我太刀ニ突貫テ」動けなくなるところを捕えられ、新田義貞に面縛された後、唐崎浜で斬首された事が述べられ、「將軍ノ執事高武藏守師直ガ猶子ノ弟」として、身代りになる者がいてもよい立場の人物であったにも拘らず豊前守が無様な捕えられ方であった事について、「偏ニ医王山王ノ御罰也ケリト、

今日ハ昨日ノ神託ニ、ゲニヤト被^(注3)思合ニテ、身ノ毛モ弥立ツ許ナリ」と描かれる。

この豊前守の最期については、前日に「大八王子ノ権現」の乗り移った「般若院ノ法印ガ許ニ召仕ケル童」が「明日ノ午刻ニ早尾大行事ヲ差遣シテ、逆徒ヲ四方ニ退ケンズル者ヲ」を予告していた事の結末でもあった。

第二章では、まず、六月五日から二十日までの合戦によって、寄手（將軍方）が「京中ニモ猶足ヲ留メズ、十方ヘ落行ケル間、洛中以外ニ無勢ニ成」ったが、「此時シモ山門ヨリ時日ヲ回ラサズ寄タラマシカバ、敵重テ都ニハヨモモ怵ヘジト見ヘ」たのに、「山門ニ様々ノ異義有テ、空ク十余日ヲ過」したため、「洛中ノ勢」は再び大軍となったにも拘らず、それを知らず、叡山の官軍は、十万余騎を二手に分けて出撃したものの、將軍方が五十万騎で迎撃したため、「牛角ノ戦」になった事が語られる。

続いて、二条大納言師基が北国から三千余騎で七月五日に東坂本に到着し、これに力を得た官軍は、十八日に京都へ押し寄せた。出撃にあたっては、前回の敗戦を教訓として軍勢を二手に分け「東西ヨリ京ヲ中ニ插テ、焼攻ニスベシ」との作戦を立てた。ところが、この作戦を知った將軍（イカナル野心ノ者カ京都ヘ告タリケン」と記される）が、軍勢を三手に分けて応戦したため、官軍は再び敗退する。そして、官軍側には、敗北が「タゞ敵内通ノ者共ノ御方ニ有ケル故」として「互ニ心を置」き合う空気が漂う。

第三章では、「両度ノ軍ニ討負テ、氣疲レ勢ヒ薄ク」なった官軍

側で、「山上・坂本ニ何ナル野心ノ者カ出来テ、不慮ノ儀アラシズラン」と安心できない後醍醐帝が「衆徒ノ心ヲ勇シメン為ニ」莊園の寄進などをおこなった事が述べられる。ただ、この措置についても、「智アル人」は「神慮モ如何有ラン」として喜ばなかった。

「三千ノ衆徒」は大講堂の大殿で全山集会を開き、興福寺へ協力要請の牒状を送る事を決めた。やがて、興福寺から協力するとの返牒が届いたので、京都を包囲する形で軍勢が派遣されることとなった。後醍醐帝は「士卒ノ志ヲ勇メンガ為ニ」着ていた「紅ノ御袴」を脱ぎ、「三寸ツ、切テ、所望ノ兵共ニ」与えた。

七月十三日^(注5)、一族四十三人を引き連れて叡山の皇居へ参上した新田義貞は「今日ノ軍ニ於テハ、尊氏が籠テ候東寺ノ中へ、箭一ツ射入候ハデハ、罷歸ルマジキニテ候ナリ」と述べて出陣していく。行軍のややあとから馬を進めていく名和長年を見て、「見物シケル女童部」が「此比天下ニ結城・伯耆・楠木・千種頭中将、三木一草トイハレテ、飽マデ朝恩ニ誇タル人々ナリシガ、三人ハ討死シテ、伯耆守一人残タル事ヨ」と話すのを耳にした長年は、「今マデ討死セヌ事ヲ、人皆云甲斐ナシト云沙汰スレバコソ、女童部マデモカ様ニハ云ラメ。今日ノ合戦ニ御方若討負ベ、一人ナリ共引留テ、討死セシ者ヲ」と独り言を口にし、「是ヲ最後ノ合戦」と決意を固めて進んで行った。

第四章は、四条隆資の進撃と敗退とを描く。開戦の合図を待っていた隆資勢（京都の南、石清水八幡宮辺に陣取っていた）は、敵が放ったと思われる火を見て、「相図ノ剋限」も待たずに東寺へと向

かう。この合戦では、將軍から、「イツモ帶副ニシ給ケル御所作リ兵庫鑓ノ御太刀」を与えられた悪源太頼直^(注7)（土岐存孝の子息）の奮戦と、「シドロニ成」て「我先ニト逃散テ、元ノ八幡へ引返ス」官軍の様子が短く描かれる。

第五章は新田義貞の京都攻めを描く。「京方」（將軍方）が「大勢ナレドモ、人疲レ馬疲レ、而モ今朝ノ軍ニ矢種ハ皆射尽シ」たのに對し、官軍方は「小勢ナレ共、サシモ名將ノ義貞、先日度々ノ軍ニ打負テ、此度会稽ノ恥ヲ雪ント、牙ヲ咀名ヲ恥ヅ」という意気込みであったので、「御治世兩統ノ聖運モ、新田・足利多年ノ憤モ、只今日ノ軍ニ定リヌ」と思われた。

「將軍ノ二十万騎ト義貞ノ二万騎ト」の対決の中で、義貞は後醍醐帝の前での誓言に従い、「天下ノ乱休事無シテ、無レ罪人民身ヲ安クセザル事年久シ。是国主兩統御爭トハ申ナガラ、只義貞ト尊氏卿トノ所ニアリ。纔ニ一身ノ大功ヲ立ン為ニ多クノ人ヲ苦シメンヨリ、独身ニシテ戦ヲ決セント思故ニ、義貞自此軍門ニ罷向テ候也。ソレカアラヌカ、矢一受テ知給ヘ」と宣言して、尊氏の陣に矢を放つ。それに対して尊氏も「我此軍ヲ起シテ鎌倉ヲ立シヨリ、全君ヲ傾ケ奉ント思フニ非。只義貞ニ逢ヒテ、憤ヲ散ゼン為也キ。然レバ彼ト我ト、独身ニシテ戦ヲ決セン事元來悦ブ所也。其門開ケ、討テ出シ」と駆け出そうとしたが、上杉重能が鎧の袖にとりついて制止したため、尊氏は「忿ヲ押ヘテ坐」するしかなかった。結局、義貞達は「万死ヲ出テ一生ニ逢ヒ」坂本へ引き返したが、名和長年は一族とともに討死した。

第六章では山門からの江州進攻と、その中の佐々木導誉（將軍方）の行動とが記される。諸方面の官軍も敗れて山上に引き返し、南都大衆も將軍からの莊園寄進により「目ノ前ノ慾ニ身ノ後ノ恥ヲ忘」れて山門への協力も翻意してしまった。「角テハ叶マジ」と考えた山門は「先江州ノ敵ヲ退治シテ、美濃・尾張ノ通路ヲ開クベシ」と、「三塔ノ衆徒五千余人」で野路・篠原へ押し寄せたが、小笠原貞宗勢に敗れる。

この時、佐々木導誉は「京ヨリ潜ニ若狭路ヲ廻テ、東坂本へ降参シ」て、「若^ニ国ノ守護職ヲ被^ニ恩補^ハ候ハ^ニ、則^レ彼國へ罷向ヒ、小笠原ヲ追落シ、國中ヲ打平ゲテ、官軍ニ力ヲ著シ事、時日ヲ移スマジキニテ候」と申し出た。帝も義貞も、導誉が「出拔テ」いるとは考えず、近江国守護職と「便宜ノ闕所數十箇所」とを恩賞に与え江州へ派遣する。導誉は「元米斟テ申ツル事」だったので、「当国ヲバ將軍ヨリ給リタル」と伝えたところ、小笠原は「国ヲ捨テ上洛」してしまった。「忽ニ国ヲ管領シテ、弥坂本ヲ遠攻ニ攻」める導誉を、脇屋義助らが二千余騎で討とうとしたが、三千余騎の逆襲を受け、坂本に引き返した。その後、山上・坂本は兵糧が尽きて、軍勢が激減して行った。

このような状況の中で、將軍から醍醐帝への働きかけが描かれるのが第七章である。尊氏は「内々使者ヲ主上へ」送り、「近臣ノ讒ニ依テ勅勒ヲ蒙リ候シ時、身ヲ法体ニ替テ死ヲ無^レ罪賜ラント存候シ処ニ、義貞・義助等、事ヲ逆鱗ニ寄テ日来ノ鬱憤ヲ散ゼント仕候シ間、止事ヲ不得シテ此乱天下ニ及候。是全ク君ニ向ヒ奉テ反

逆ヲ企テシニ候ハズ。只義貞ガ一類ヲ亡シテ、向後ノ讒臣ヲコラサント存ズル許也」と述べ、京都への還幸を奏請し、「御不審ヲ散ゼン為ニ」として伝教大師に誓いを立てた「起請文」を添えて、浄土寺の忠田僧正のもとへさし出した。起請文を信用した後醍醐帝は「傍ノ元老・智臣」にも相談せず、「聽テ還幸成ベキ由」の返事をした。喜んだ尊氏は「サモ有ヌベキ大名」にも「潜ニ状ヲ通ジテ」味方になるように誘った。

新田の一族である江田行義・大館氏明が「イカナル深キ所存」があったのか「二人共降参セン」として、帝のいる山上へ登ったりする動きがあったのを、義貞は知らなかった。洞院実世から「只今主上京都へ還幸可成トテ、供奉ノ人ヲ召候。御存知候ヤラン」と伝えて来たのに対しても、義貞は「サル事ヤ可^レ有。御使ノ聞誤ニテゾ有覽」と平然としていたが、江田・大館の動きも怪しいと考えた堀口貞満は、馬を急がせ皇居へ駆け付け、「臨幸只今トミへ」る後醍醐帝の「鳳輦ノ轅ニ取付、涙ヲ流シ」て、「抑義貞ガ不義何事ニテ候ヘバ、多年ノ粉骨忠功ヲ被^ニ思召捨^ハテ、大逆無道ノ尊氏ニ叡慮ヲ被^ニ移ケルゾヤ」と難詰し、義貞を「上古ノ忠臣ニモ類少ク、近日義卒モ皆功ヲ讓ル処ニテ候キ」と称揚した上で、「当家累年ノ忠義ヲ被^ニ捨テ、京都へ臨幸可成ニテ候ハ^ニ、只義貞ヲ始トシテ当家ノ氏族五十余人ヲ御前へ被^ニ召出^ハ、首ヲ刎テ伍子胥ガ罪ニ比、胸ヲ割テ比干ガ刑ニ被^ニ処候ベシ」と、「忿ル面ニ泪ヲ流シ、理ヲ碎テ」と訴えたところ、帝も「御誤ヲ悔サセ給ヘル御気色」を見せ、供奉の人々も「理ニ服シ義ヲ感ジテ、首ヲ低テ」いるのみであった。

第八章では、後醍醐帝の決断が記される。堀口より後に参内した新田義貞達に対し、帝は「例ヨリモ殊ニ玉顔ヲ和ゲサセ」て、義貞・義助を近くに呼び、「御涙ヲ浮べ」て、堀口貞満の主張を「一儀其謂アルニ似タリトイヘ共、猶遠慮ノ不_レ足ニ当レリ」とし、義貞が同じ源氏の尊氏に味方せず、朝廷の衰亡を救った事を評価し、「天運時未_レ到シテ兵疲_レ勢_レ耗_レヌレバ、尊氏ニ一旦和睦ノ儀ヲ謀テ、且クノ時ヲ待_シン為ニ」還幸するのであると語り、義貞には越前国に下って「且ク兵ノ機ヲ助ケ、北国ヲ打随ヘ、重テ大軍ヲ起シテ天下ノ藩屏トナルベシ」と依頼する。更に、帝の京都還幸によって義貞が「朝敵」と見做される事を避けるために「春宮ニ天子ノ位ヲ譲テ、同北国ヘ下シ奉ベシ。天下ノ事小大トナク、義貞ガ成敗トシテ、朕ニ不_レ替此君ヲ取立進スベシ。朕已ニ汝ガ為ニ勾踐ノ恥ヲ忘ル。汝早ク朕ガ為ニ范蠡ガ謀ヲ廻ラセ」と「御涙ヲ押ヘテ」語ったため、「サシモ忿レル貞満モ、理ヲ知ラヌ夷共モ」全員が落涙した。

「九日ハ事騒キ受禪ノ儀、還幸ノ粧」に日が暮れたが、その夜更けに、義貞は秘かに「日吉ノ大宮権現」に詣で、戦勝を祈願して、新田家の累代重宝の鬼切という太刀を献納した。

第九章では、「十月十日」の後醍醐帝の還幸と、東宮（恒良親王・新田義貞達の「北国落」が記される。同時に、妙法院宮（尊澄法親王・宗良親王）は遠江国へ、阿曾宮（懷良親王）は山伏姿となって吉野の奥へ、四条隆資は紀伊国へ、中院定平は河内国へと、それぞれ赴いた事が付記され、涙を伴う別離が哀感を込めて描かれる。

京都に戻った帝らの事が描かれるのが第十章である。まず、還幸

の行列が法勝寺辺に近付いた時、足利直義が後醍醐帝の元に赴き「三種ノ神器」を「当今」（光明天皇）に渡すように伝えたのに対し、帝は「兼ヨリ御用意有ケル似セ物」を内侍に渡した。^(注8)その後、帝は花山院に幽閉され、「降参ノ武士」は一人ずつ大名達に預けられた。更に、本間孫四郎・道場坊助注記祐覚の斬首なども記される。

第十一章から第十五章にかけて、北国の情勢が叙述されていく。

第十一章では、十月十一日に琵琶湖北西の「塩津・梅津」に着いた新田義貞達七千余騎が、「七里半ノ山中ヲバ、越前ノ守護尾張守高経大勢ニテ差塞ダリト聞」き、凍死者を出しつつ「木目峠」を越えていく様子が描かれる。その道中で、河野・土居・得能の三百余騎は討死し、道に迷った千葉介貞胤の五百余騎は、高経からの使者による説得を受け「心ナラズ降参」する。

十三日に敦賀に付いた義貞は、恒良親王・尊良親王を金崎城に入れて自分もそこに留まり、義頭を越後へ下し、義助を瓜生氏の仙山城へと送る。

その瓜生氏の対応が描かれるのが第十二章である。十四日に仙山へ赴き、瓜生判官保・兵庫助重・弾正左衛門照の三兄弟に歓待された義助は「白幅輪ノ紺絲ノ鎧」を与える。それを光栄に思った瓜生保は、自分の館に帰ると「小袖甘重」を調進し、「御内・外様ノ軍勢共ノ、余ニ薄衣ナルガイタハシケレバ」と考え、小袖を送ろうとして、「倉ノ内ヨリ絹綿数千」を出して縫製させた。

ところが、斯波高経が「前帝ヨリ成レタリ」として「義貞ガ一類可_二追罰_一由ノ論旨」を秘かに使者に伝えさせたため、「元ヨリ心遠

慮ナキ者」であつた瓜生保は、「將軍ヨリ謀テ被_レ申成_ニタル繪旨」とは思はず、「天ノ恐モ有_レベシト、忽ニ心ヲ反ジテ」杣山城にたて籠つてしまつた。

一方、瓜生保の弟で禅僧の義鑑房が、鯖並の宿へ義助・義頭を訪ね、兄の保は「愚痴ナル者」ゆえに偽繪旨を信じたが「事ノ様ヲ承リ開キ候程ナラバ、遂ニハ御方ニ参ジ候ヌ」と述べ、時機を待つて挙兵するために「御幼稚ノ公達」一人を預けていたきたいと「涙ヲハラハラトコボシ」て告げた。義助・義頭が義鑑房を信じ、義助の「鍾愛他ニ異ナル幼少ノ一子」である十三歳の義治を義鑑房に預けた。

夜明けとともに移動しようとした義助・義頭は、三千五百余騎の軍勢が二百五十騎になつてしまつた現実を目の前にして、鯖並から敦賀へと帰らざるをえなくなる。

その帰途、「近辺ノ野伏共ヲ催シ集テ、嶮岨ニ鹿垣ヲユヒ、要害ニ逆木ヲ引テ、鐵ヲ調ヘテ」待ち伏せしていた越前の住人今庄九郎入道浄慶を「今庄法眼久經ト云シ者ノ、当手ニ属シテ坂本マデ有シガ一族共ニテゾ有ラン」と思った義助は、事情確認のために由良越前守光氏を送る。ところが、浄慶は、父・久経が官軍方として「軍忠ヲ致シ」た「御恩ノ末」をありがたいとは思ふものの、自分は足利方に属しているため、そのまま通過させる事はできないから「御供仕候人々ノ中ニ、名字サリヌベカランズル人」の首を差し出せば、それを「合戦仕タル支証」にしたいと述べる。光氏の報告を聞いた義助が「進退谷リタル体ニテ、兎角ノ言モ出」せないでいるのを見

た義頭は「浄慶ガ申所モ其謂アリト覺ユレ共、今マデ付纏タル士卒ノ志、親子ヨリモ重カルベシ」として、光氏の再度の説得に浄慶が応じない場合には「力ナク我等モ士卒ト共ニ討死シテ、将ノ士卒重ズル義ヲ後世ニ伝ヘン」と述べた。光氏が再び浄慶の所へ赴いたのに對し、浄慶が「猶心トケズシテ、数刻ヲ移シ」たため、光氏は「馬ヨリ下テ、鎧ノ上帯切テ投捨」て、「天下ノ為ニ重カルベキ大將ノ御身トシテダニモ、軍勢ノ命ニ替ラントシ給ゾカシ。況ヤ義ニ依テ命ヲ輕ズベキ郎從ノ身トシテ、主ノ御命ニ替ラヌ事ヤ有ベキ。サラバ早光氏ガ首ヲ取テ、大將ヲ通シ進ラセヨ」と言い終わらずに腹を切ろうとした。光氏の忠義ぶりを見た浄慶は「浄慶コソイカナル罪科ニ当ラレ候共、争デカ情ナキ振舞ヲバ仕リ候ベキ。早御通り候ヘ」と言い泣く泣く一行を通過させた。浄慶の態度に感激した兩大將（義助・義頭）は「我等ハタトヒ戦場ノ塵ニ没ストモ、若一家ノ内ニ世ヲ保ツ者出来バ、是ヲシルシニ出シテ今ノ忠義ヲ顯サルベシ」と言つて「金作ノ太刀」を浄慶に与えた。

第十二章の末文は「光氏ハ主ノ危ヲ見テ命ニ替ラン事ヲ請、浄慶ハ敵ノ義ヲ感じテ後ノ罪科ヲ不_レ顧、何レモ理リノ中ナレバ、是ヲキキ見ル人ゴトニ、称嘆セヌハ無リケリ」と結ばれるが、第十三章は、浄慶との交渉が「難儀」と聞いた新田勢の二百五十騎が十六騎になつてしまつたとの記述からはじまる。その十六騎は「大勢ナル体ヲ敵ニ見スル様ニ謀レ」として「十六人ガ鉢巻ト上帯トヲ解テ、青竹ノ末ニ結付テ旗ノ様ニミセテ、此ノ木ノ梢、彼ノ陰ニ立置テ、夜明けとともに「中黒ノ旗一流」を差し揚げて敵陣の後ろへ進攻し、

「瓜生・富樫・野尻・井口・豊原・平泉寺、廿二劍・白山ノ衆徒等、二万余騎ニテ後攻仕候ゾ。城中ノ人々被ニ出向 候テ、先懸者共ノ剛臆ノ振舞委ク御覽ジテ、後ノ証拠ニ立レ候ヘ」と、「声々ニ喚テ時ノ声」を揚げた。

まづ先に進んだ武田五郎は「京都ノ合戦ニ切レタリシ右ノ指末痊ズシテ、太刀ノツカヲ拳ルベキ様モ無」かったため「杉ノ板ヲ以テ木太刀ヲ作テ」右腕に結び付けており、二番目に進んだ栗生左衛門は「帶副ノ太刀」が無かったため「深山柏ノ回り一尺許ナルヲ、一丈余ニ打切テ金才棒ノ如ニ見セ、右ノ小脇ニカイ挟テ、大勢ノ中へ破テ入」った。これを見て金崎城を包囲していた「寄手三万余騎」は、「スハヤ柚山ヨリ後攻ノ勢懸ケルハ」と大混乱を生じた。これに勢いづいて城中の軍勢八百余人は、十六騎を助けるために打って出た。結局、「雲霞ノ如クニ充滿シタル大勢」は四散して、「皆己が国々へ」帰ってしまった。

第十四章は、金崎城での小康の時間が描かれる。「百重千重ニ城を囲ミタリツル敵」が退散したことを喜び、金崎城の城中の人々は十月二十日に船遊びをする。管絃の最中に、船中へ魚が飛び込んだ事をめぐって、洞院実世の、それを瑞兆とする故事引用に基づいて料理人が直ちに調理して東宮に献上したこと、更に「嶋寺ノ袖ト云ケル遊君」が、その場にふさわしい詠歌をしたことで、全員が感動し落涙した次第が語られる。

第十五章では、新田勢の十六騎に欺かれて足利方の寄手が敗退した事を聞いた將軍は、「大ニ忿ヲ成シテ」、欺波高経の五千余騎をは

じめとする六万余の大軍を派遣する。しかし、「三方ハ海ニ依テ岸高く巖滑」らかな金崎城は攻略しにくく、小笠原貞宗が「究竟ノ兵八百人ヲ勝テ」城に迫ったものの、栗生左衛門や氣比大宮司らの奮戦によって、敗退する。続いて、今河頼貞が作戦を変えて「小舟百艘」で攻撃したが、結局、撃退される。この攻撃の中では、負傷して舟に乗り遅れた中村六郎という武士を、「アレ／＼ト許ニテ、助ントスル者モ無」かった時に、「播磨国ノ住人野中八郎貞国」が味方の舟を無理に漕ぎ戻し、中村に走り懸かった敵の「頸ヲ取テ鋒ニ貫キ、中村ヲ肩ニ引懸テ、閑ニ舟ニ乗」った武勇譚が「敵モ御方モ是ヲ見テ、「哀剛ノ者哉」ト誉ヌ人コソ無リケレ」と描かれる。ただ、戦況そのものは、「寄手大勢也トイヘ共」「徒ニ矢軍ニテゾ日ヲ暮シケル」という膠着状態を記して、巻十七は終わる。

二

楠正成の死をも含む建武三年（一三三六）の△長い時間▽が、巻十四から巻十八へと続く。その中で、巻十七は、六月から十月に亘る時間軸に、京都から北陸へと延伸する空間の△面▽が重ねられての展開を見せる。

後醍醐帝による「公家一統政治」は、出発段階から、さまざまな問題を噴出して行ったが、それに対抗する形で台頭してくる「將軍ノ代」とは、どのようなものが、巻十七では徐々に語られていくことになる。

その中で、帝から「今日ノ合戦何ヨリモ忠ヲ尽スベシ」と声をかけられた時の、新田義貞の「合戦ノ雌雄ハ時ノ運ニヨル事ニテ候ヘバ、兼テ勝負ヲ定メガタク候」という発言（第三章）や、僅か十六騎になった脇屋義助・新田義頭達の作戦（第十三章）は、それぞれ補正的なものと見る事ができ、物語としては、巻十六以前と連続性を持つ。

又、今庄浄慶や由良光氏のように節を重んじる忠義の武士（第十二章）や、窮地に立たされている味方を決死の覚悟で救出する野中八郎のような勇敢な武士（第十五章）も登場し、それらの挿話が『太平記』を物語的に支えてもいる。

ところが、巻十七が呈示する「物語的現実」は、第一章の光澄・隆賢の行動、第二章の文末にある「敵内通ノ者共」や、第三章冒頭文の「野心ノ者」などの存在こそが、戦況を変化させて行くことを露呈している。

そして、斯波高経からの使者によって届けられた將軍よりの偽論旨を、後醍醐帝の論旨と思い込んだため、脇屋義助達への協力をやめた瓜生保の場合、「元ヨリ心遠慮ナキ者」「愚痴ナル者」と記されるものの、使者と対面する直前までの、義助達への歓待ぶりは、地方武士としての誠意に基づく行為である。

それに対して、佐々木導營の場合、味方である小笠原貞宗を追い遣って、守護職と土地とを我が物にするという実質的利益を獲得するとともに、後醍醐帝・新田義貞を「出拔」いて偽りの「降参」をするという行為は、はるかに政略的なものである。

なお、新田義貞は、三月末に播磨国白旗城を攻撃中に、赤松円心による同様の裏切りを体験しており（巻十六）、後醍醐帝の京都還幸の動きについても「斯ル事トハ不_レ知給_二」と記され、洞院実世の報告を受けても「サル事ヤ可_レ有_二、御使ノ聞誤ニテゾ有_レ覧」という反応しか見せない（第七章）など、大きく変質しつつある現状についての状況把握の甘さが見られる。

そのような義貞に対して、帝は「天運時未_レ到シテ兵疲_レ勢_レ廃レヌレバ、尊氏ニ一旦和睦ノ儀ヲ謀テ、且クノ時ヲ待_二ン為_二」還幸することを涙ながらに釈明し（第八章）、脇屋義助、新田義頭も、義鑑房の前で「尊氏若強テ申事アラバ、休事ヲ得ズシテ、義貞追罰ノ論旨ヲナシツト覚ルゾ、汝カリニモ朝敵ノ名ヲ取ランズル事_レ不可_レ然。春宮ニ位ヲ讓奉テ万乗ノ政ヲ任セ進ラスベシ。義貞股肱ノ臣トシテ王業再_レ本ニ復スル大功ヲ致セ」との帝の言葉を信じ続けようとしている（第十二章）。

しかし、その後醍醐帝については、山門衆徒の「心ヲ勇シメン為ニ」莊園を寄附した帝の姿勢について、「智アル人」が「神慮モ如何有ラン」との懸念を示し（第三章）、又、「八王子権現」の憑依した童が、合戦の勝負を山門の大衆から尋ねられた時、「涙ヲハラハラト流シ」ながら「何ニモ吾山ノ繁昌、朝廷ノ静謐ヲコソ、心ニ懸テ思フ事ナレ共、叡慮ノ向フ所モ、富貴榮耀ノ為ニシテ、理民治世ノ政ニ非ズ、衆徒ノ願フ心モ、皆驕奢放逸ノ基ニシテ、仏法紹隆ノ為ニ非ザル間、諸天善神モ擁護ノ手ヲ休メ、四所三聖モ加被ノ力ヲ不_レ被_レ回。悲哉、今ヨリ後朝儀久ク塗炭ニ落テ、公卿大臣蜚_レノ

奴トナリ、国主ハルカニ帝都ヲ去テ、臣ハ君ヲ殺シ、子ハ父ヲ殺ス世ニランズル事ノ浅猿サヨ」と語り（第一章）、更に、帝が足利尊氏の要請を受けて京都に還幸する事を知った堀口貞満も、義貞を見捨てようとする帝を難ずる言葉の中で「洛中数箇度ノ戦ニ、朝敵勢盛ニシテ官軍頻ニ利ヲ失候事、全ク戦ノ咎ニ非ズ、只帝徳ノ欠ル処ニ候歟。仍御方ニ参ル勢ノ少キ故ニテ候ハズヤ」と批判的言辞を投げつける（第七章）。このように、帝は神からも臣下からも批判され、否定的展望の中に位置づけられているわけである。

新田義貞は、後醍醐帝に向かつて「天下ノ落居ハ聖運ニ任せ候ヘバ、心トスル処ニ候ハズ」と述べて京都へ出陣していき（第五章）、足利尊氏も、義貞を迎撃するに当たって、「我此軍ヲ起シテ鎌倉ヲ立シヨリ、全ク君ヲ傾ケ奉ント思フニ非。只義貞ニ逢ヒテ、憤ヲ散ゼン為也キ」と語り（第五章）、帝への還幸要請の使者にも、「止事ヲ不得シテ此乱天下ニ及候。是全ク君ニ向ヒ奉テ反逆ヲ企テシニ候ハズ。只義貞が一類ヲ亡シテ、向後ノ讒臣ヲコラサント存ズル許也」と奏上させ（第七章）、一貫して後醍醐帝には敵対していないという姿勢をとり、義貞との対立構造に固執する。しかし、帝が叡山からの京都還幸を直ぐに決めた事を知ると「サテハ叡智不_レ浅ト申セ共、欺クニ安カリケリト悦」んだともあり、京都に戻った帝を忽ち花山院に幽閉した事の方に、尊氏の現実があったと考えられる。つまり、『太平記』作者は、「内通」の者に対する「天罰」「神罰」「医王山王ノ御罰」という、人間界を超越する規範を厳然とした形で定着させつつも、北陸に向かった官軍側が凍死・討死・降参など

を経て、たとえば「三千五百余騎」から「二百五十騎」に、更には「十六騎」へと激減していく現状と、佐々木導營のごとき人物_{（注1）}をも抱え込み、尊氏自身が後醍醐帝を「欺クニ安カリケリ」と見做す現実主義とを、拮抗する形で描き続けていく中で、結局は「將軍ノ代」に収斂していかざるを得ない_{（注2）}歴史_{（注3）}を語っている。

しかし、この現実としての「將軍ノ代」は、正成が語ったそれとは、明らかに懸隔するものでもあった。

（注1）引用は、テキストとした日本古典文学大系本（岩波書店）による。ただし、振仮名・送り仮名は省略し、原則として新

字体に改めた（以下全て同じ）。

（注2）テキスト「立掃サヌ」。西源院本（刀江書院）の「立返ヌ」に従った。なお、この場面で、西源院本は、千種忠顕の戦死と「サシモ忠貞式ナク、拙賞人ニ過テ、君モ深ク御憑有ケルニ依テ、一命ヲ輕クシテ失ニケルコソ哀ナレ」（新字体に改めた）という一文を載せるが、テキストには「一人モ不_レ残討レテケリ」とあるのみである。

（注3）天正本（新編日本古典文学全集・小学館）は、頭注で「実否不明」とする。

（注4）テキスト頭注は「師基等が初めて京を攻めたのは十八日ではない。十を衍字として八日とすれば文意が穏やかである」とする。天正本は、年表で「この日の合戦記事、虚構か」と記す。

(注5) テキストは「同十七日」と記す。後出の牒状の日付「延元年六月日」に従えば六月十七日という事になるが、第二章の記事と齟齬を来たす。テキスト頭注は牒状の日付について「さきに六月晦日に義貞が京を攻めて敗れているから、七月が妥当」とする。

(注6) (注4) 参照。テキスト頭注も「史実は六月三十日か」とする。

(注7) テキスト頭注も指摘する如く、「悪源太」という呼称で叙述する事によって、『平治物語』の「悪源太義平」の人物像に重層させる効果がある。

(注8) 後醍醐帝は、元弘元年(一二三二)に、笠置が落城して捕えられ、三種の神器を光厳帝に渡すように告げられた際にも、虚偽の答えをした事があった(卷三)。

(注9) 万里小路藤房が自ら遁世して姿を隠す事で、楠正成が無言で戦場に赴く事で、それぞれ表現しようとしたことを、貞満は遂は言葉として指摘したと言える。

(注10) 「聖運」という語は、卷十八で正成に向かって、坊門清忠が、その優位性を主張したものであったが、正成は義貞に対して「聖運トハ申ナガラ、偏ニ御計略ノ武略ニ依シ事ニテ候ヘバ」と述べたものでもあった。

(注11) 高豊前守が「仏敵・神敵」として、その最後が語られる事も、やがて、同族としての高師直の人物形象に関与することを予感させる。